

イスラーム・ジェンダー学科研 2021 年度

イベント名：『Voices from the homeland』上映会

日 時：2021 年 8 月 29 日（日）13:00～16:00

会 場：Zoom を利用したオンライン開催

司 会：岡真理（京都大学）、小野仁美（東京大学）

登壇者：中島由佳利（ノンフィクションライター）、中島夏樹（作曲家・映像作家）、磯部加代子（クルド文学翻訳家・トルコ語通訳）

小野：本日は映画『Voices from the homeland』上映会にお集まりいただきありがとうございます。前半の司会を務めます小野と申します、どうぞよろしくお願ひ致します。

本日上映する『Voices from the homeland』は、トルコに暮らすクルドの吟遊詩人デングベジュの歌と語りを取り上げたドキュメンタリー映画です。現在埼玉県南部には多くの在日クルド人の方々が暮らしてらっしゃいますが、6月に川口市でこの映画の上映会がありました。そこに私も参加させていただき、デングベジュの美しい言葉と歌に魅了されました。ぜひ多くの人たちにクルド人のこの文化を知ってもらいたい、そしてこれがクルド人の問題を含む様々なことを考えるきっかけになればという思いで上映会を企画致しました。

上映に先立ちまして、クルド人問題研究家の中島由佳利さんより、映画についての簡単な解説を兼ねて、クルド人とはどこに暮らす、どんな人たちなのかというお話をいただきます。中島由佳利さんは『新月の夜が明けるとき：北クルディスタンの人びと』という御著書を出されています。それでは早速、よろしくお願ひ致します。

中島：こんにちは、中島由佳利と申します。今日は埼玉県の川口にありますココシバさんというブックカフェから中継させていただいておりますので、まずはココシバさんからご挨拶いただきたいと思います。

小倉：はじめまして。Antenna Books & Cafe ココシバ (<https://cocoshiba.com/>) の小倉と申します。ココシバは埼玉県川口市芝、蕨駅から徒歩5分のところに位置しており、こちらで本とコーヒーとイベントを提供して3年ぐらいになります。在日クルド人と言われる人たちが多く住む地域がこの川口芝地区になるかと思ひます。クルド関係で言えば、週に1回だけ木曜日の夕方に子供たちに学校の勉強の補習をしています。それから、月に2回から3回クルドのお母さんたち、女性たちをお呼びして先生になってもらってオヤ教室を開いております。オヤとはクルド伝統の刺繍です。スカーフの縁などに施します。これらはココシバという店がやっているというより、お店に関わっている人たちがこの場所を使って活動して下さっているという感じですね。さらに店ではクルドのおやつを月替わりくらいで提供しています。本などもなるべく移民・難民関係の本は多めに入れるようにしています。ぜひお近くにお越しになったらお立ち寄りいただけると嬉しいですね。

中島：ありがとうございました。それでは私から今日の『Voices from the homeland』をより深く味わっていただくためのちょっとした基本情報をお知らせしたいと思います。この映画は『地図になき、故郷からの声』というのが、日本語の題名になっており、クルド人のデングベジュという吟遊詩人の方たちがテーマになっています。

クルド人というのは、ティグリス・ユーフラテス川の上流域、山岳地帯に居住する遊牧部族生活をしてきた中東の先住民族です。国を持たない世界最大の民族とも言われていますが、人口は正確には分かっておらず、一説には3000万から4000万人とも言われています。現在の世界地図で言えば、トルコ、イラン、イラク、シリアなどが居住地域になっていてその他に世界中に移民・難民としてコミュニティがあります。母語はクルド語ですが、クルド語の中にも方言がいくつかありまして、クルマンジー・ソラニー・グラニ・ザザといったように、地方ごとにちょっとずつ違ったクルド語が喋られています。クルド人は独特の文化を持っており、それが特徴的に表れているのが音楽だったり、踊りだったり、NEWROZというお祭

りだったり、また民族衣装というものだったりします。クルドの人たちはいわゆるクルディスタンという地域に居住していますが、これは国ではなくクルド人たちの住んでいる地域をさす呼称です。この地域はだいたい50万平方メートルぐらいあると言われていて、国で言うとフランスと同じぐらいの大きさがあります。

今日ご覧いただく映画はトルコの南東部で撮影されています。



左の方のカフラマンマラシュ、ガズィアンテプ、アドゥヤマンという3つの都市は日本にいるクルドの方々の出身・故郷という風になっています。もちろん他の地域から来ていらっしゃる方もいるのですが、この3つの県から来ている方が圧倒的に多いです。地図の中の真ん中辺にあるディヤルバクルは、クルド人の首府と言われる場所です。その隣のバトマンや右の方のハッカリも、本映画の撮影地です。

日本の在日クルド人たちは、埼玉県の川口市を中心に2000人ぐらい住んでいます。1990年代の初頭から来日しています。現在はその第一世代の後、第二世代、第三世代も育っています。そのほとんどが日本で難民申請をしているのですが、日本では難民として認定された人は1人もいません。アメリカ、カナダ、ドイツ、イギリス、フランスでは多くのクルド人が難民認定されていますが、日本ではされていません。

さて、クルド人という人たちのざっくりとした歴史をお伝えしたいと思います。紀元前8世紀のイラン高原でメディア人によるメディア王国が成立しましたが、それがクルド人の祖先ではないかとクルド人の方々は言っています。紀元前612年がクルド元年と言われていています。NEWROZというお祭りの起源はこの紀元前612年と言われていています。クルド人のカワという人が、その頃悪政を敷いていたデハックという王様を倒して悪政を終わらせたという神話がありまして、それがNEWROZの起源となっています。紀元前550年ぐらいからペルシャの支配下に入ります。その後7世紀アラブ・イスラームの支配下に入り、9世紀以降になると大小様々なクルド人の侯国が誕生しています。16世紀後半からはオスマン帝国に併合されていきますが、オスマン帝国は多民族の帝国で、とても寛容なところがありました。以降の300年間、クルドの人たちは実質的な独立自治を行って来ています。それが劇的に変わってしまうのが、第一次世界大戦の後です。オスマン帝国はもう崩壊に向かっていますけれども、ドイツに味方して第一次世界大戦で敗戦します。敗戦は1918年ですが、それよりちょっと前にサイクスピコ協定というのが行われていて、イギリス、フランス、ロシアなどによってオスマン帝国の分割が話し合われました。敗戦後、ケマル・アタテュルクという人が立ち上がりトルコ独立戦争を起こします。そして西欧の列強と戦って、1923年にトルコ共和国を建国しました。そこに行く過程で国際条約が二つあり、一つが1920年のセーブル条約、そしてその後のローザンヌ条約、この二つの条約を通して、トルコ共和国が建国されます。ただ、クルド人にとってみれば、建国後が苦難の道のりに入ってしまったということになります。

ここで、セーブル条約とローザンヌ条約について説明をさせていただきます。1920年のセーブル条約は連合国と、衰退していったオスマン帝国（イスタンブール政府）で締結しています。ここで締結した条約の中でオスマン帝国は見る影もなくなってしまうわけです。西欧列強、それからギリシャなどにもう占拠されていて、それを追認するというものでした。オスマン帝国の領土はアナトリアの一部とイスタンブールのみになってしまいます。ただこの条約の中では、アナトリア東部のアルメニア人国家の建設、それからもう一つがクルド人の自治およびその後の独立ということが明記されていました。ところが、トルコ独立戦争が続き、ケマル・アタテュルクの戦いが勝利すると1923年にローザンヌ条約が締結されます。これは連合国と、新しいアンカラ政府（アタテュルクの政権）が結ぶわけです。この内容というのは屈辱的だったセーブル条約、これを実施させるのを阻止した条約になります。そして現在のトルコの領土が確定されています。ただ、このローザンヌ条約はクルド人たちにとっては残念な条約で、セーブル条約の時にあったクルド人の自治、その後の独立というのは削除されていました。こうして、今の世界地図にあるように、クルド人の居住地域はシリア、イラク、イラン、トルコなどに分断される形になりました。1923年にトルコ共和国が建国されると、トルコ共和国にいるのは全てトルコ国民であるということが掲げられました。ですので、クルド民族の存在は否定され、クルド人は山岳トルコ人と呼ばれたりしました。クルド民族の存在が否定されたため、この映画のテーマにもなっている「言語」、つまりクルド語の使用が禁止されました。加えて、クルド文化に関わること、その表現が徹底的に禁止され、人の名前や地名などもクルド語からトルコ語に変更されるという手段でクルド民族の存在が否定されていきます。

本日上映する『Voices from the homeland 地図になき、故郷からの声』、これはデングベジュという人たちが主人公になっています。デングベジュというのは、クルド語が禁止されていた中においても、クルド語で語り歌い、そしてクルド語の文学、文字で書かれたものではない口承文学を守り抜いてきた人たちです。クルド語とクルドの伝統文化を守ってきた芸術家、文化人であるわけです。

最後に、この映画にはクルド語とトルコ語が使用されています。字幕については、クルド語は括弧付き、そしてトルコ語は何もなしというように記し分けています。

小野：大変分かりやすく詳細な解説をどうもありがとうございました。それでは上映を開始いたします。

『Voices from the homeland 地図になき、故郷からの声』上映

岡：京都大学の岡真理と申します、よろしく申し上げます。私は中東現代文学研究会を主催しております、今年1月の研究例会の時に中島監督と磯部さんに参加していただき、今日の映画のパイロット版を上映し、解説をしていただきました。その後また、追加の取材・撮影に行かれて、このような形で完成版ができて、広く色々な方に見ていただく機会が作れて、私としてもとても嬉しいです。今回はコロナのせいでZoomでの配信になりましたが、映像それ自体が色々なことを語っている作品だと思いますので、直接スクリーンで見られる機会が作れたらいいなとも思っています。

本日はこの映画の監督である中島夏樹さんと、トルコ語の通訳として取材・撮影に同行された磯部加代子さんからお話をうかがいます。中島監督、磯部さん、よろしく申し上げます。

それでは早速ですが、まず、中島監督から自己紹介と、そして、デングベジュをテーマに作品を作りたいと思われた動機などをお話いただけますでしょうか？

中島：ありがとうございます、中島夏樹と申します。私はこれまで作曲家として音楽活動をしてきましたが、今回は初めて映像作品を制作しました。私は東京芸術大学で作曲の勉強をしてきて、大学院で映像の勉強もして、今回初めて作ったという形です。私が音楽家ということもあって、音楽に特化して取材をしたいと思ったのですが、私の母が昔から何度もクルディスタンに行って取材をしていたので昔からクルド人の存在だとか、在日クルド人の皆さんと関わりもあって、私の中でクルド人の存在は結構大きかったです。母親がクルディスタンで撮ってきた映像のなかに素晴らしい音楽が溢れていて、ずっとその事を忘れられなかったので、2年前に初めて行ってみたいと思って、音楽を探す旅にクルディスタンに

母と仲間たちと一緒に行きました。そこでデングベジュの方々に出会って、それがきっかけとなって今回に至りました。

岡：ありがとうございます。では、磯部さんも自己紹介をお願いします。

磯部：磯部加代子と申します。トルコ語の通訳や、トルコ語で書かれたクルド人の文学を翻訳しています。拙訳『あるデルスィムの物語』はココシバさんにも売っていますので、よろしくお願いします。

私は20年ぐらい前にトルコに住んでいたことがあり、その後東京のトルコ人の会社で勤務して、ずっとトルコ的な生活をしてきたのですけれども、去年、中島親子に誘われて映画撮影の同行を初めて経験しました。すごく楽しくて良い経験になりました。ずっと一日中通訳で大変でしたけれども、得難い経験だったなと思っています。

岡：磯部さんはトルコ語クルド文学の翻訳者でもあり、磯部さんが訳されたムラトハン・ムンガン編著の『あるデルスィムの物語』は、日本で初めてのクルド文学の作品集ではないかと思います。磯部さんのクルドとの関わりは長いですね。磯部さんご自身はデングベジュについて以前からご存知でしたか。

磯部：名前も存在も知っていましたが、あまり興味はありませんでした。というのも、私はクルド語も分かりませんし、「なんとなくおじさんたちが唸っているもの」くらいの認識しかなかったのです。音楽を専門にする方がそういう風に思い入れがあって、それについて取材したいということで初めて私も扉が開いた感じでした。

岡：1月にパイロット版を見せていただいた後、追加の取材・撮影に行かれたわけですが、全体として、どれぐらいの期間をかけて取材をされたのでしょうか。またそこでも色々な方たちと出会われていると思いますが、その辺りのお話を聞かせていただけますか。

中島：今回訪れた地域は南東部で、最東部はドウバヤジットなどのほぼイランとの国境近くです。ハッカリはイラクとの国境の近くの地域です。期間についてですが、最初2年前に行った時は2週間くらいです。去年は3週間くらいで、この間の春は10日間くらいでした。そんなに長くは滞在できませんでしたが、ひとつの地方について2-3日間、バスで移動して色々な地方に行きました。



この写真の3人の男性は私が初めて出会ったデングベジュの方々です。ディヤルバクル（クルディスタンの首都みたいな所と言われているところ）のクルド文化センターで会いました。この方々がトルコ語を使わずにクルド語のみで会話をされていて、凄く力強い握手をしてくださって、クルド語であらうって「スパーズ」って言うんだよ、とクルド語を教えてくださいました。その力強さと歌声に圧倒されました。



この写真は映画にも出てくださったアフメッドさんという方で、右の写真はユルマズ・ギュネイというクルド人の映画監督の絵が飾られているカフェですけれども、こういう文化的な本だったり映画だったり、そういうものがたくさん溢れているカフェで色々お話を伺ったり様々な所に案内していただいたりしました。

磯部：アフメッドさんはすごくよく喋る方です。映画ではまるで哲学者のような雰囲気ですが、撮影中はほぼジョークしか言わない感じの方でした。

岡：さきほど、ユルマズ・ギュネイ監督の映画『路』のイラストが写っていましたね。若い方はご存知ないかもしれませんが、この作品は80年代のカヌ映画祭でグランプリを受賞しました。フェデリコ・フェリーニ監督の「みち」は「道」ですが、ユルマズ・ギュネイ監督の「みち」は「路」です。ギュネイ監督の作品はその後、『敵』や『希望』も日本で公開されましたが、当時は「トルコ映画」として紹介されていましたね。でも、実はクルドの問題を描いた作品だったわけですね。

それでは次に、磯部さん、トルコではどのようにデングベジュを取材されたのでしょうか。

磯部：まずはデングベジュを探すことから始まりました。最初はディヤルバクルで出会ったデングベジュに取材する予定でしたがコロナの影響で叶わず、振り出しに戻ってしまったので。クルド人のデングベジュを知ってそうな人に声をかけたら、今度は多く集まりすぎてしまい、最後は撮影も断念したほどでした。映画では二つのストーリーがメインになっていましたが、その2人のデングベジュは在日クルド人の方が紹介してくれたツテからだったので、それはすごく嬉しかったです。

岡：映画の最後に出てきた在日クルド人の男性の方の大叔父さんがデングベジュということですよ。

磯部：本人は叔父さんと言っていますが、彼がたまたま SNS 上でデングベジュの叔父さんの映像を流していて、これはデングベジュじゃないかということで聞いたら、僕の大叔父さんだよという話になりました。もう亡くなってしまったということでしたが、ご家族を訪ねてもいいですかと伺ったらぜひ行ってほしいということで、あれよ、あれよという間に繋げてくださいました。もう一人のカセットの物語の方は本当に何もかも偶然という感じです。行ってみたら、イスマイルさんというデングベジュの方がいて、話をしてくださって、村まで行こうということで、急遽行ったという感じです。

岡：デングベジュを探すことから始めて、しかも最初の撮影旅行が2-3週間で、次がわずか10日間、短期の取材・撮影旅行で、これだけの作品を創られたのは、大きな驚きです。

日本でクルドという言葉が私達が目にしたり耳にしたりするのは、最初の中島由佳利さんのお話にもあったように、在日クルド人の難民の話であったり——まさにその問題を描いた『東京クルド』という映画が今、公開されていますね——、あるいはイラク戦争やISとかいった中東の紛争で、「クルド」という名前が聞かれる。だから、つねに難民問題や戦争という、ネガティブな文脈の中で、私たちの多くは「クルド」という言葉に出会うのではないかと思います。この映画が大変貴重だと思うのは、私たちがもっぱ

らそうしたネガティブな形でしか「クルド」というものと出会えないなかで、埼玉に大勢いるクルドの人たちのホームランドが一体どんな所で、どういう文化を持っていて、それにどのような愛着を抱いていて、そして、どういう言葉を喋っているのか、そういったことがデングベジュの歌もそうですが、それだけではなく、映像を通して——最後羊を放牧している山あいの風景で終わっていましたが——、声、歌、音楽、風景、風の音、鳥の鳴き声……そういうものを通して、私たちがまったく別の形でクルドというものと出会う、そういう機会を提供しているというのが、本当にとても重要だと思います。

今日は監督と、取材撮影に同行された磯部さんに来ていただいているので、特にデングベジュや作品そのものについてお話を伺っていきたくと思います。クルド語には色々な方言があるということですが、先ほどの監督のお話ですと、結構東の方だとイラン国境に近かったり、あるいはイラクに近かったりという事でしたが、そうするとそのデングベジュの人たち、あるいはクルドの人たちの言葉も、かなり違うのでしょうか？

中島：トルコ南東部で話されているクルド語は一応大きく分かれたうちのクルド語の中のクルマンジーというものはあるのですが、やはり地方によって聞き取れなかったりとか、発音のニュアンスやトーンが違ったりして、地域が違くと小さいコミュニティの中でも話が通じないということがあったりするみたいです。それでデングベジュの歌そのものもそういうことがあるようで、全く違う地域の人が聞くと聞き取れなかったりすることがあるみたいです。

岡：字幕では、クルド語の場合は、日本語訳にカギかっこが付いていて、話しているのがトルコ語なのかクルド語なのかの区別が分かりやすくなっていましたが、最初と最後に登場されたデングベジュのアフマドさん—私はアラビストなので、ついアラビア語式に発音してしましますが、トルコ語だとアフメッドですね—その彼が最初の場面で、「今日クルド語で話すことができればもっと色々な事を表現できるのだけれども」とおっしゃっていましたね。磯部さんはトルコ語の通訳で、クルド語は分からないと最初おっしゃいました。ということは、クルド語で語られているものは、一旦トルコ語に翻訳されて、またそれを日本語に訳したということでしょうか。

磯部：はい、歌に関わる所はなるべくクルド語でお願いしました。映画で使いたいというのがあります。そもそも本人たちがよりよく表現できると思ったからです。クルド語からトルコ語の通訳はまた現地調達というか、本当にたまたま出会った人たちがやってくれたという感じです。あとは、アフメッドさんはトルコ語も話しますし、クルド語も話すので両方ご自身が通訳してくださって進めたところもあります。もちろん他の方もトルコ語はおできにはなるのですが、ちょっと分かりづらいところがあり、あとはなるべく私達はクルド語を聞きたかったので、クルド語をメインに進めました。

岡：通訳とか言語に関して、中島監督から補足されることがありましたら。

中島：クルド語についてですが、私は、クルド語はとても歌に向いている言語だと思いました。一つの単語を表現する時、例えば虹の場合には「雨の花嫁」という表現をします。一つの単語にもすごく文学的な意味が詰まっているというか、すごく難しい言語だとは思いますが、すごく美しく、歌にぴったりだと思いました。

磯部：在日クルド人の話すクルド語はよく耳にしておりましたが、印象が全く違いました。地図で見ていただいたように結構トルコ南東部の方でも東西に横に長く、南東部の中の西の方から来ている人が多いので。そこはトルコ人とクルド人が一緒に住んでいるような地域なのでトルコ語が入っている割合がすごく多くて、聞いているとトルコ語なのかと思うような言語だと思っていましたが、ハッキリの方まで行くと、すごく綺麗なクルド語が残っていて、全く印象が異なり、音が凄く綺麗だと思いました。音楽家の監督にとっては痺れるものになったのではと思います。

岡：80年代に『ハッカリの季節』という映画も公開されていますが、これも「トルコ映画」として紹介されましたが、ハッキリということは、クルドの人々の物語ですね。また、観る機会があったら、話されている言葉にも注意を向けたいと思います。

さて、ここから作品の内容、それからデングベジュそのものの話に移っていきたいのですが、デングベジュが歌う歌はどのような内容なのかということは作中でも色々な箇所の説明がありましたが、改めて、彼らはどういう内容の歌を歌っているのか教えていただけますか。

中島：大きく分けて大体三つに分類されます。一つは恋愛の歌、もう一つは英雄伝だとかそういうもの、もう一つが苦しみについてです。あるデングベジュにお話を聞いた時、デングベジュは秘密の友達なんだよとおっしゃっていました。それはどういうことかということ、例えば母親とか父親とか友達とか、そういう人たちにも言えないような自分の中に秘めておきたいけれども苦しいものをデングベジュには言えるのだ、デングベジュはそういう存在でなければいけなくて、そういう個人の想いを聞いて、個人の名前とかは出さずに歌にして、普遍的なものにしていく。それを聞いた人がそれをまた自分のものとして取り込んで共有、共感するだとか、そういう役割があるのだということをおっしゃっていました。ですので、それぞれの個人史や想いを届けるという役目もデングベジュにはあります。

岡：例えば英雄伝などというのは語り継がれてきた過去の歴史的英雄の話だと思いますけれども、恋愛とか苦しみの歌というものは、もちろん昔から歌い継がれてきた古いものなどもあるかもしれませんが、それだけではなくて、今、個人が体験している事をデングベジュに語って、それをデングベジュが歌にして歌う、ということですね。テーマで分けると三つぐらいに分けられるけれども、もし別の分類をしたら、代々語り継がれてきたものと、今起きていてそれが今そこで歌にされてという二通りあるという理解でよろしいですか。

中島：はい、そうですね。それなので元々ある古い歌もちろんありますが、コンサートだとかそういう時には大体そういう古い歌を歌われて、そもそもデングベジュというのは家族、親戚、知り合い、友達、そういう人たちが集まって部屋の中で聞くという文化なので、そういった本来の場所で歌う時は、現在起きていることだとか、その場にいる人から話を聞いて即興で歌ったりだとか、そういうこともあるそうですが、そういうものはメディアに出したりコンサートで歌ったりとかはほとんどしないそうです。

岡：では、デングベジュ自身はそうやって色々な人の家を回っていくわけですか。

中島：そうですね、色々なお家を回ったり村から呼ばれたり。例えば事件や悲しい出来事があると、デングベジュを呼んで歌ってもらう文化もまだあるみたいです。

岡：そういったプライベートな場にデングベジュが来て歌ってくれた機会に、ちょっと、ちょっと、と隅に呼んで、実は私失恋しちゃったの、みたいなことを言って、それで、それがまたデングベジュの歌になっていくということでしょうか。

中島：はい。

岡：代々語り継がれている歌ではなく、プライベートに作られたものはデングベジュ一代限りで終わってしまうのですか、それとも、それがまた代々共有されて歌い継がれていくのでしょうか。

中島：歌い継がれていくパターンもちろんあるとは思いますが。今回私は、字幕を歌の部分だけ付けませんでしたがそれには理由があります。もちろん最初に歌を聞いたときは何を歌っているのかもさっぱり分からず、でもその音がダイレクトに入ってくることによってなぜか涙が溢れて、本当に振動とか、息遣いだとかそういうものに単純に感動したので、まずそれだけで味わっていただきかけたというのが一つあります。それから当初の予定では歌詞に字幕を付けようと思っていましたが、日本に帰ってきて色々なクルド人の人たちに歌詞の意味を教えると聞いて回った時にそれぞれみんな言うことが異なっていたことが面白かったです。「それは俺にとってはこういう歌だ」のようにみんな表現されたので、そういうことなのかと思って。もちろんちゃんと分析すれば歌詞もあるのでしょうか、でもそれをみんな初めて聞いたときに、自分のものとして捉え直すだとか、歌うデングベジュによって、メロディは一緒でも、もしかしたらそのデングベジュがアレンジして歌っている場合もあると思うので、そのようにみんなにとって自分

のオリジナルの歌詞が出来上がっているという事が分かったので、これに字幕をつけるのはナンセンスではないかと思いました。

岡：映画の中で、一瞬暗くなって映像もない場面がありましたよね。ご覧になった方々は、なにかテクニカルプロブレムで映像が消えたのでは…と焦った方もいらっしゃったかもしれませんね。私が最初にあのブラックアウトした場面を見た時に感じたのは、その後で映像が出ますが、やっぱり映像があると、歌っている人物だとか着ているものだとか、あるいは背後に飾ってあるものだとか、そういうところに色々意識がいつてしまっていて、でも、ブラックアウトしている時に歌を聞くと、本当に、純粹に「声」だけが感じられて、それ自体がすごく貴重な経験だと思いました。だから多分、字幕を入れないというのも、字幕が出てくると、声に関心を払う注意が、ことばの意味の方に引きずられてしまうのかなど。でも、やっぱりどんなことを歌っているのか、少し気になりますよね。

中島：今回はそういう事もあり、一応歌詞も書き起こしていただきました。現地で今回も撮影を手伝ってくださったクルド人の方とかにまずクルド語を訳してもらって、そこからトルコ語に訳してもらって、そこから磯部さんにトルコ語から日本語に書き起こしていただきました。一曲目は映画の最初に使われていた歌で、二曲目は映画には全く使われていないのですが、私個人的には凄く良い曲だなと思ったので、共有させていただきます。

磯部：一曲目について、これは有名な歌らしいです。フェキイエ・テイランというデングベジュが、村々を歌い歩いているうちに、帰ってきたら好きな人が死んでしまったという内容の歌です。どんなに好きだったかなどが結構長いバージョンで歌われています。歌詞の中には出てきませんが、アフメッドさんの説明によると、片思いだったスイネムという女性のお墓を訪れて、そのお墓の前で歌うという場面のようです。歌った時にお墓の前の草がみんな緑を取り戻して元気になった、みたいな伝説もあるらしいです。これは時代もはっきり分かっている16世紀終わりから17世紀初めとのことでした。場所は、イランの国境沿いにあるワンという町の話だそうです。ちょっと恥ずかしい感じの、日本人は言わないような内容の歌詞なので、翻訳しながら少し戸惑いました。

二曲目について、これは映画にも登場していたイスマイルさんというデングベジュの方がうたう「イスカンの歌」です。イスカンという勇敢な男性がいて、でも彼が殺されてしまって、妹がお兄さんのことを思って歌っている歌だとざっくり聞いていました。今回翻訳するためにクルド語からトルコ語、トルコ語から日本語に翻訳して書き起こしました。ただ、非常に登場人物が多く、たくさんの敵の人がいて、その人にはどうやら軍隊がついている。恐らくオスマン帝国時代の話だと思いますけれども、どうやら軍隊の人から目をつけられていたらしく、それで殺されたのだということが分かるような歌になっています。あまりにも登場人物が多いので、誰がどうなっているのかと思い質問したところ、家族の名前や個人の名前に複数の呼び名があったり、手下にも名前があったり…そして、もしかしたら同じ人かもしれないし、全く違う人かもしれないし、などのいくつかの構想があり物語が進んでいるのだとすれば、これを理路整然と分かるようにすることはかなり難しいです。結局のところこの歌は部族内の人たちが自分たちの身に起きた事を部族の中で語り継ぐ役割があるのではと思いました。それなので私達がこの歌詞を読んだとしても納得できる所はあまりないのですが、ただ、音を聞くことによって、そこに込められた悲しみなどは感じ取れると思います。

中島：この曲、実はメドレーになっていて、聞いた時は全然気が付きませんでした。後に歌詞を起こしてもらったら、実は違う歌に移っていて、その繋がりが良くわかりませんでした。特に突然戦争の話から、メロンの話になるところなどは。

磯部：これはすごい議論になりました。私たちは泉のほとりにメロンがあるという事は、「首がもげた」というメタファーかと思ってそんなものをお母さんに見せては大変だと思って、「これって大変な話だね」と翻訳してくれたクルド人の方に言ったら、「全然そんなことない、ただのメロンです」と言われて。「絶対違う」と言っても、「本当にそうだからそういう風に日本の人に言わないで、絶対君が間違っている」と言われました、未だに釈然としないですけども。「僕たちはこうやって大げさに物事を表現する民族なので、そういう風に捉えられると困る」と言っていたのでそうなのかもしれないですけども

…でもまだ煮え切らない気持ちがあります。その後続いたものは有名な恋の歌の一部だったようで、歌っているうちに恐らくイスマイルさんの調子が出てきた結果、3曲メドレーになっていました。この時の撮影は良かったです。ネイという笛も入って調子が良かったのだなと思いました。映画では上手く組み込めなかったのですが。

岡：映画の中で、木の下にいたおじさんが「君達もクルド語がわかれば、きっとデングベジュの歌を聴いたなら泣いてしまう」と言っていましたね。“クルド語がわかる”ということは、『歌っている意味がわかれば』という意味で私たちは受け取ってしまうと思います。けれども今、歌詞を拝見してみると、仮に意味がわかったとしても理解するのは難しいかもしれませんよね。つまり、「ある言語がわかる」ということは、「意味がわかる」という次元の話ではない、ということがよくわかりますね。

磯部：おそらく、おじさんも“意味がわかれば”というより、「俺達に何が起きたのかが君達に伝われば」ということを仰っていて、それが「意味」という言葉に還元されてしまっているのだと思います。常々クルド人と付き合っても感じるところです。“意味”がわかれば、あなた達もわかるでしょう、というのは、つまり“何が起きたか”という背景について知っていればという意味だと思います。

中島：映画に登場するアフメットさんが、「別に歌を聴くのはクルド人でなくてもいい。意味がわからなくても、あなた方が聴けば、あなた自身の辞書を見つけると思うよ」と仰っていました。私は、そういう風に受け止めています。

岡：「虹」が「雨の花嫁」という言葉で語られるのも、それが単に「虹」あるいは「雨の花嫁（虹）」と訳されたのでは、クルド語で歌われている世界に直接的に触れられませんよね。「意味」だけの話ではないということですね。



岡：先ほどアフメットさんが歌っていたこの場所はどこなのでしょう。

中島：これは「デングベジュ・エヴィ（デングベジュの家）」といわれる所で、ここでよくデングベジュは歌います。コンサートのような感じで、歌う空間になっています。クルディスタンの中にワン湖という大きな湖があるのですが、その辺りにあるワンという町にあります。

磯部：コロナで閉鎖中でしたが、この時はわざわざ私達のために開けてくれました。

岡：クルド人が集住している町にあるのでしょうか。

中島：デングベジュの文化が発展している地域にしかないと思います。ワンの他にはディヤルバクルにあ

りますが、それ以外にまだ私は知らないです。

岡：ここでは二人の人が笛を吹いていますね。映画の最後の場面で、アフメットさんがウードのようなものを弾きながら歌っていましたが、デングベジュが歌う時には普通、楽器演奏はつくのですか、つかないのですか。

中島：伝統的なデングベジュの歌は基本的に楽器を伴わないのが普通です。最近では、エンターテインメントとして広げていきたいこともあり、楽器によるセッションが行われたりもしますが、基本的にデングベジュは語りと声だけで表現されます。今回〔画面に〕映っている、この笛のようなものは「ネイ」といいますが、「ネイだけは違う。ネイはクルド人にとって大切な楽器であり、声が一番近い楽器だと思っている。これだけは特別で、楽器だけれどもデングベジュの歌に合うものだと思っている」と、デングベジュのイスマイルさんが仰っていました。〔画面の〕右から二番目が有名なネイ奏者のチェティン・ホジャさんという方で、クルド語が禁止されていた時にアルメニアのラジオではクルド語の放送があったらしく、この人はアルメニアからの「エレヴァン・ラジオ」という放送をなんとかして引っばってきて家で聴いていたそうです。それでデングベジュの歌を学び、「ネイでデングベジュと一緒に共演したい」と思ったそうです。

岡：「声」って、ふつうは意味を持った「言葉」を運ぶためのメディアですよね。けれどもデングベジュの歌声を聞いていると、声そのものの物質性というか、声それ自体がある種の楽器であるかのように感じました。

中島：確かにそれはありますね。あとは「アー」とか、母音が多いのです。歌詞の合間によくありますが。それは痛みや苦しみを表しているらしい。言葉にならない痛みや目に見えない傷跡を「アー」という音で表しているそうです。

岡：なるほど。イスマイルさんが着ている衣装は普段着ですか。それともデングベジュの衣装ですか。

中島：これはデングベジュの伝統の服です。

岡：アフメットさんも最後に、太い帯の衣装を着ていましたね。座っているからよくわかりませんが、ズボンが独特の感じがします。ただ、お二人のシャツが普通のワイシャツのように見えますが、これも伝統衣装なのですか。

磯部：シャツまではわかりませんが、上着とズボンと帯は伝統衣装だと思います。

中島：あと、今回はありませんが、頭にぐるぐる巻いたりもします。

岡：イスマイルさんは左手に数珠を持っていますね。中東であればムスリムの人とか、特に年配の人はよく持っていますけども。これはデングベジュのパフォーマンスと何か関係あるのでしょうか。

中島：パフォーマンスとはそんなに関係ないそうで、精神安定剤というか、「落ち着けるために持っています」とのことでした。

岡：映画の中で、イスマイルさんのお母さんがデングベジュの歌を歌っていた、とありましたね。女性のデングベジュはいないのですか。

中島：今回、映画には出せなかったのですが、女性のデングベジュにも取材をしてきました。政治的な内容の歌だったりもしたので、映画には使わなかったのですが、「本来は女性がデングベジュの役割を担うことが多かった」と、どの方も仰っていました。というのも、イスマイルさんのお兄さんの語りの場面でも少し出てきましたが、外で歌うことが恥とされていた文化があって、けれども家の中では常に歌っていたそうです。実際に取材に行った時も、私達に向けて歌を披露してくれた時とは別のタイミング

で、お母さんがキッチンでご飯をつくりながら一人で歌を歌っているのを見ました。お母さんは、「いつもこんな風に歌っているのよ、家事をしている時も常に歌っている」と言っていました。どんな歌を歌っているのかと尋ねると、「息子が亡くなってしまって、その時の悲しかった想いを自分で曲にしたの。女性は家族に向けて、家族の中の悲しみを歌にするだとか、そういう役目を女性が担ってきた」と言っていました。そして、私は Dengbeju ではなくて、“Delts・Beju” だと。「Delts」というのは「苦しみ」、つまりは苦しみを伝える人、とのことです。最近はその文化も変わってきて、女性も Dengbeju として公の場に立つようになり、Dengbeju・Evi で歌ったりもしています。

岡：昔は、女性の Dengbeju は自分の家庭の中だけでしか歌わなかったのですか。それとも、Dengbeju が本来、呼ばれて行ってクローズドな家族の集まりなどで歌うものだとしたら、たとえば、よそのお家に行って女性達の集いで歌うとか、そういうことはなかったのですか。

中島：どうなのでしょう。もしかしたらあったかもしれないですね。小さなコミュニティとか、身内の中ではあったのかもしれない。たとえば人が亡くなったときに、大きな声をあげて歌うという習慣があるので、もしかしたら誰かが亡くなって集まった時とかに女性が歌ったりしていたかもしれません。地域の結婚式くらいであれば、きっと女性も歌っていたと思います。

岡：映画の最初の場面などで、男性によるトルコ語のナレーションが入っていたと思います。あのナレーションは、Dengbeju がどのようなものなのかを伝えてくれるものだと思うのですが、あの文章について説明していただけますか。

中島：あのテキストは、Mehmet・Uzun というクルド人の作家によるものです。彼は、小説はクルド語で、エッセイはトルコ語で書いている作家です。今回旅をしていた時に、ハッカリの地方の本屋さんで、Uzun の「我が Dengbeju 達」というエッセイを見つけました。磯部さんがそれを日本語に訳してくださいだったので、今回の映画にも使わせていただきました。

磯部：Uzun に関しては、以前「ザクロの花」というエッセイを翻訳したことがあり、それは『中東現代文学選』2012 年に掲載いただきました。Uzun はトルコのクルド人作家で、頑なにクルド語で書くことをしてきた人です。私は、クルド語はわかりませんが、トルコ語で書かれたものなら翻訳することができます。そうした事情で、小説を翻訳するのは二重訳になってしまうのでなかなか厳しいものがありました。オリジナルがトルコ語で書かれたものを翻訳したのが、まず 2012 年の「ザクロの花」です。今回も 2020 年の『文学選』に何か出そうと思い、何にしようかと考えていたところ、ハッカリの本屋でエッセイに出会ったので「これは…！」と。また Uzun になってしまうな…、とは思ったのですが、読んで翻訳したところ、監督がえらく気に入って映画に使うことになりました。

ちなみに、冒頭で Uzun のテキストを読み上げたのは、こちらにいるカズムさんです。トルコ語ではキャズムさん。日本で暮らしていらっしゃいます。

カズム：こんにちは。初めまして。今回ナレーションに挑戦したのは、自分にとっては初めての経験でした。磯部さんがとても厳しく、「もっと心を込めて」と言われて何回もやり直しました。

磯部：「Uzun の文章なのだから、もっと湿っぽく」とお願いしました。Uzun の文章は、トルコ語で読んでいて、とても水分が多いと感ずるのです。私はどちらかというとカラッとした文章が好きなので、その感じを読む人には出してほしいと思って、「もう少し気持ちの中に入って」とかカズムさんに言っていました。

岡：Uzun 自身はすでに亡くなっていますが、Uzun 自身が読んでいたのかなと思うくらいナレーションが素晴らしかったです。カズムさんご自身は Dengbeju の歌を直接聞かれたことはありますか。

カズム：自分が子どもの時に聞いたことがあります、今のデングベジュと一緒にどうかはわかりません。少し違う感じだったと記憶しています。歌はクルド語で、盲目のデングベジュでした。よく近場の村とか町に、結婚式とか大きなお祝いの時に呼ばれて、年上の人の別の部屋で歌っていました。子ども達は入れませんが、外から聞いたことはあります。その時は子どもだったので、何を言っているのか、何をしているのか、はっきりわからなかったです。

岡：久しぶりに、日本でデングベジュの映画をご覧になって、どのように感じられましたか。

カズム：もう日本に来て長くなりましたが、自分が日本に来た時はクルド人のことを知っている日本人はほとんどいませんでした。けれども今は、デングベジュとか他のことでも日本人がクルド人のことをよく知ってくれるようになって嬉しいです。こうした映画で、日本人にこのような民族や文化があることが伝わるのが嬉しいです。

岡：今のカズムさんのお話を伺うと、この映画を観てデングベジュについて知り、それを通してクルドの人達やそのホームランドについて知るといえることが、すごく大切な、大きな意味をもっているのだと、あらためて思います。この映画はクルドの方々と私達をつなぐものなのだ、と感じました。カズムさん、ありがとうございました。

冒頭でも述べましたが、私は「中東現代文学研究会」を主宰しておりまして、研究会活動の一環で、2012年に『中東現代文学選 2012』を出しました。そこに磯部さんの訳で「ザクロの花」というエッセイが載っています。今回の映画で引用されていた「我がデングベジュたち」は、の『中東現代文学選 2020』に収録されます。

次に、アルメニアの話も少しお聞きしたいのですが。

中島：映画の後半に、在日クルド人の方が喋っていたところでアルメニア人の話が出てきます。現地で取材していた時も、高確率でアルメニア人の話をクルド人の方々にはされていました。「ここはアルメニア人の遺跡だから、行った方がいいから連れて行ってあげるね」、「ここは元々アルメニア人の村があったところだよ」、「ここはアルメニア人の墓だよ」とか言って、たくさん連れて行ってくれました。「私達は本当にアルメニア人と一緒に兄弟のように暮らしていて、私たちは本当に仲が良かった。けれども自分達がアルメニア人に対して酷いことをしてしまって、本当に悲しい…」と。どの人に会っても「本当に仲が良かったのだ」と仰っていました。だから、クルド人にとってアルメニアの存在はすごく大きいのだと思います。ちなみに、映画の冒頭に出てくるシーンはアルメニア人の遺跡です。撮影中、どこにいてもアルメニア人の風が吹いているような感覚をおぼえました。

磯部：アルメニアの事もクルドの事も、トルコで大きな声で喋るのは難しい気がします。だけどアルメニア人の事を聞いてもないのに、クルド人の皆さんは述べてくれます。そのことも、きっちり私達は知っていかなければならないと思いました。クルド人はまず自分たちのことで精一杯なので、そのことについて語る余裕がそんなに無いです。ですから、私達の方から積極的にアプローチしていくことは大事だと思います。

岡：今、磯部さんが仰っていたように、クルドの問題もアルメニアの問題も、非常にセンシティブな問題ですよね。特にクルドに関してのセンシティブな部分が、この映画の中でも随所に垣間見える気がします。そうした点で、取材や撮影の上でご苦労はありませんでしたか。撮影する側だけでなく、実際に撮影される側のことでも。映画に登場される方達も自分の発言などを、セルフモニターしていたのかなと思うのですが。どうでしょう、差し障りのない範囲で。

中島：そこが一番大変だったところですよ。私達が危ない目に遭うことより、取材した彼らが危ない目に遭わないように、それが一番気をつけなければいけないことでした。実際に、映画に使われていない場面もたくさんあります。「話はするけど、これは見せないでね」とかもありました。今回、映画に出している部分は皆さんに承諾をとっています。もちろん、私も本当はいろいろ言いたいことはあるのですが、イン

フォーメーションとして作品の中で出してしまうのではなくて、物語の中にどうしても染み出てくるものや見えてくるものがあると思うので、どちらかというと、そういうメッセージというより、本当の彼らのそのままの姿や物語を、そのまま受け取ってもらいたいな、という想いで作りました。

磯部：木の下のおじさんのシーンが私は大好きで、おじさんがすごく良い味だしていると思っています。あのおじさんに会うのは結構大変で、あっち行ったりこっち行ったりしながら、やっとそこにたどり着いて、さんざん待たされて、話してくれたのですけども。話している途中で、車でやってきた知らないおじさんが登場しましたね。あのシーンで「シリアから来たデングベジュは何語を使っていたのですか」という、こちらの質問に対して木の下のおじさんは「クルマンジー」と。途中から来たおじさんは「トルコ語」と、言っていたのですね。このシーンは何度も聞き直して、絶対「トルコ語」って言っているよな、と確信を得て字幕をつけました。

でも、よく考えたらおかしいじゃないですか。なぜシリアから来た人がトルコ語の歌を歌っているの？滑稽だな、と思ったのですけれども。わざと解説を入れずに、字幕だけを入れる形にしました。その時、その場では気づけなかったのですが、後で映像を確認した時に、この人「トルコ語」って言っているな、と。これをどうやって反映させるかを話し合いました。

中島：きっと「トルコ語」と言ったのには、いろいろ理由があると思っています。もしかしたら、デングベジュのことを守るために言ったのかも、私は思っています。後から来たおじさんは、そこで「おまえ、あまり言い過ぎるなよ」という態度をずっと取られていたので、私はきっとそうなのだと思います。監視をしている側の人間というよりかは、きっと守ろうと思って咄嗟に出たのではないかな。

磯部：私も何を話しているのかわからなかったのですが、映画の中でも取材でコーディネートしてくれた男の子と後からやって来たおじさんが、ちょこちょこ話をしているのが映り込んでいたと思います。「(小声で)大丈夫なのか？こんな話をして…」という感じだったのかもしれない。あえて聞きませんでした。最初は、監視に来たおじさんかな？感じ悪いな、と思ったのですが…。あのシーンに関しては、すごく話し合いました。「あのおじさんを守ろうとしていたのではないか？そういう可能性もあるよね」と、監督はそういう風に思っています。

中島：なぜなら、その後に「我々はクルド民族なのだから」と言い直しているのです。だから、きっとそれは咄嗟に出た発言なのではないのか、と。

磯部：「本当は自分だってそう言いたいのだよ…！」と。

岡：それは観ていても伝わりました。監視する立場とは思わなかったです。

中島：そうですか。やはり向こうにいと、そういう人が来てしまうのではないかと…。結構こちらでも警戒しているところがありますので。

岡：あと同じ場面で歌の内容について、左側のおじさんが「殺されたり弾圧されたり…」と言っている一方で、右側のおじさんが「恋愛の歌もあるだろう」と、なるべく話をマイルドにしようとしている。そういうところの説明や解説はないけれども、そこを通して観る者に感じてほしい、というような作りになっている、ということはよくわかりました。

映画の中で、むしろ教育を受けてしまったがために、もうクルド語がわからなくなっている、との話もありましたが、デングベジュの若い世代への継承のようなものは、なされているのでしょうか。

中島：ワンのデングベジュの取材に行った時に、二十歳のデングベジュの見習いがいらっしやいました。少しずつそのような取り組みは行われているようですが、やはり若者のデングベジュ離れは進んでいるのが現状です。なので、どうしても楽器を取り入れたり、YouTube をやってみたりするタイプがいる一方で、やはり伝統的な文化を守らなければいけない、エンターテインメント性のあることはしない、声だけで、という骨のある人もいます。今のところ、日本のクルド人の若い友達なんかにもよく歌を送っ

てくれるのですが、人によっては、デングベジュは愛されていますね。

岡：では、その送ってくれる人自身はちゃんと内容がわかるということでしょうか。

中島：そうです。彼の場合はトルコ語もクルド語も上手です。

岡：デングベジュの歌や歌声とか、そこで語られる内容が、クルドの風景というか、あの世界の中で紡がれてきたものだとすると、たとえクルド語がわかるとしても、クルド語に半分トルコ語が混じるような、都市部で生まれ育ったクルドの人達とデングベジュの距離は、とても大きくなるのではと思いました。

磯部：本当にそう思います。すごく距離感があると思います。木の下のおじさんを撮影した場所は、在日クルド人が来ていた場所なのです。あの辺では、そこまでデングベジュの伝統は無かった。だから「村で最後のデングベジュ」と言われていましたよね。ハッキリとかワンとか、イランやイラクの国境に近い所はすごく盛んで、クルド語でボタン地方とかセルハット地方とかいろいろ名前があるのですが、歌い方もそれぞれ違います。それを4月にたまたま出会うってコーディネートしてくださった研究者の人が、歌い分けて歌ってくれました。時には「牛追い歌」など、非常に日本の東北の歌に近いものもあります。彼らも羊を放牧しながら歌ったのかもしれない。なんだか似たようなところがあるなと繋がりを感じました。距離がある一方で近しいものを感じる…まさに文化のおもしろさだな、と思いました。

岡：そうですね。最初の話では、デングベジュの歌自体がお家の中で家族に向かって歌うと伺いましたが、むしろヨーデルのような、広い空間に響き渡るような形で歌われていたのではないかと、思わせる歌声もありましたね。

磯部：そうです、ヨーデルのような歌い方も実際にあります。広い所で、見晴らしがいい所で歌う時はおそらくそんな風に歌いたくなるのでしょうか。そういう所で「歌ってみて」と言うと、ヨーデルみたいなものを歌ってくれました。まるで山彦が響く感じの歌い方です。

岡：その一方で、子どもの時に日本に来られた人とか、日本で生まれ育って日本の学校に行き、というクルド人の方もいますよね。お家ではクルド語でご両親と話しているかもしれないけど、クルドの環境の中で育っていない人達にとって、デングベジュはどういう意味があるのでしょうか。

中島：それを聞きたいとすごく思っています。この間、川口で上映会をした時にもクルド人の方々が来てくれましたが、やはり年配の方は思い出して下さったようなのですが、若い人の意見はまだ聞けていないので。

岡：ここまで、皆さんから Q&A の方にきた質問を織り交ぜながら、中島監督と磯部さんに質問を投げかけてきました。限られた時間の中でご紹介できなかったものや、デングベジュやこの映画に直接関係のない、あるいは極めて政治的なものに関しては、別の機会に譲りたいと思います。

最後の質問ですが、ラストの場面では子鳥の声や風の渡る音が入っていて、すごく印象的な場面でしたが、音声はどのように収録されたのでしょうか。

中島：音声は、単純なカメラ用のガンマイクで少し良いものを買って、自分でカメラに付けて採っています。本当に元の音が良いので、雑音も入らずにすごく綺麗に採れた、と自分でも思っています。

岡：この映画はデングベジュだけでなく、映像もまるで歌っているかのような作品だと思いますので、できることなら大きなスクリーンで観ていただきたいのですが、今後、上映会の計画はありますか。

中島：まだできておらず、これからそういう機会をどんどん作っていきたいと考えているところです。この間、川口で上映した時に、地元の人達やクルド人が観に来てくれたことが、自分にとって、すごく大切なことでした。まずはもう一度、私が一番観てもらいたかった、そういう人達に向けて上映できたらいい

かな、と思っています。もちろん、その後いろいろな方にも観てもらいたいので、映画館とかで上映できたらすごく嬉しいですが。

特に私がやってみたいと思うのは、デングベジュの人達を実際に招くことです。映画の中だけでは伝わらない部分が生声にはありますので。そういう企画も、そのうちできればいいなと思っています。

岡：デングベジュの歌を生で聞いてみたいですね。その場合、歌われる環境も大切ですね…いろいろ夢は果てしないですが、参加者の皆さんで協力いただける方がいらっしゃれば、是非アイデアをいただきたいと思います。

ということで、これでトークは締めたいと思いますが、最後にお二人から一言、視聴者の皆さんになにかメッセージがあればお願いいたします。

中島：この作品は、デングベジュについての映画ですが、私は、デングベジュという職業の人達だけでなく、今回映画に登場してくれた人すべてがデングベジュだと思っています。語り継いでいくこと、映画にも登場するウズンの言葉で「耳を傾ける者達よ」という言葉がありますが、そこが一番伝えたかったところ。映画を通して、皆さんが自分のこととしても捉えていただけたらすごく嬉しいです。

磯部：私は、クルド語が禁じられてきたから口承文学が残ってきたと考えていましたが、もしかしたら逆かもしれないと考え始めています。つまり、こんなにも豊かな文化があるからわざわざ書く必要がなかったのでは、と。意味が分からなくてもこんなに通じるものなのだな、ということ、自分が現場まで行かせてもらって体感してみて実感しました。今まで「意味」の世界にずっと入り込んで「意味があることに意味がある」と、思っていたのですが。もしかしたら、そうではないのかもしれない。今回は「音の方に注目する」という、私にとって良い機会になりました。「音」を聞いて何を感じるか、その感情や感じ方に、あまり人間に変わりはなく、そういうところで人は繋がれるのだと思いました。言葉がわからないと「わからない」ということでシャッターを下ろすこともあります。例えば、植物が根っここのところで繋がっていて、どこかの木が枯れそうになると、すごく遠くの方からエネルギーを送ったり、水を送ったりできるという話があるように、おそらく人間もそういうことができると思うので、遠くの誰かに何が起きたのかを知っていくという事は、何も「意味」だけで為し得ることではないのではないか、と。この映画を通じて、この作品を通じて感じました。

岡：どうもありがとうございました。今日は、作品主体のトークになりましたが、今後、この映画あるいはクルドをめぐる政治的な問題に関しても、皆さんと共有できるような機会をつくっていったら、と思います。中島監督、磯部さん、今日はどうもありがとうございました。

小野：今日は、長い時間どうもありがとうございました。デングベジュというクルドの文化の継承者が、歌や語りでクルドの文化を伝えていく。デングベジュの歌や語りを、中島夏樹監督が映像として私達に伝えてくださった。そしてそれを今日、皆さんとともに共有できたことに、本当に感謝いたします。

最後に、イスラーム・ジェンダー科研の代表者の長沢栄治先生から一言いただきたいと思います。

長沢：今日は、休日にもかかわらず、たくさんの方に参加していただき、ありがとうございました。司会の岡さんが仰いましたように、政治的な問題その他に関してはまた別の機会ということで、引き続きいろいろな機会をつくっていきたいと思います。

個人的な感想になりますが、デングベジュは声に魂を吹き込むとありましたが、そのような哲学的、詩的な表現がすばらしかったと思います。最初の中島由佳利さんの解説の地図のところで、小さな湖がたくさん映っていました。ダムによって多くのクルドの村や町が水没し、これからも水没していく可能性があり、いろいろな危険が迫っている。中島由佳利さんの解説を聞いて思い出したのが、エジプトとスーダンの国境にまたがって住んでいるヌビアの人達のことです。ヌビアの村は、アスワン・ハイダムの建設によって水沈してしまいました。ヌビア出身の有名な音楽家で、ウード奏者でも知られるハムザ・エル・ディーンさんという方は、いろいろな差別——エジプトではヌビア人に対する差別、欧米ではアフリカ系の人

に対する差別——を逃れて、一時的に日本で暮らしていました。国境を越えて日本にやって来られた、音楽家ハムザ・エル・ディーンさんのことを思い出しました。また、もう一つ思い出したのが、私は板橋区の平和学習をやっている皆さんと付き合っているのですが、その関係で彼らがアフガニスタンから日本に招聘した、ムハンマド・アガイさんという方がいます。最近のターリバンのカーブル制圧にともなって、近況を知らせる動画を送ってくださった。そこで、名前は知らないのですが横笛をただ静かに家の中で吹いてらっしゃる、動画を送ってくださったのを観て、確かに国境を越えて歌や音楽が私達のところへ届いていることを思いました。映画の中ではアフメットさんが、「ただ人間である」というようなことを仰っていましたが、歌や音楽を通じて「ただ人間である」ことを確認することができた。横笛の音を聞いて、現在のアフガンの置かれている状況と人々に対する想いというのも我々に通じることができますし、クルドについても同様だろうと思います。最後に磯部さんが仰っていたように、我々は草のように根っこで繋がっている、という事なのだと思います。そういう点でまた、このような機会をつくっていくことができれば、と思っております。

私の家の近くでも、解体現場などでクルド人の方が働いているのを目にすることがあります。皆さんも日常的に、川口や蕨市に住んでいなくても、実は首都圏ではクルド人の方々の姿をあちらこちらで我々は目にしていると思います。それを本当の「隣人」として理解するという、貴重な機会だったと思えました。改めて、監督はじめ皆さんに感謝申し上げます。どうもありがとうございました。

小野：ありがとうございました。それでは、これで映画『Voices from the homeland』の上映会および講演会を終了いたします。
